

伊豆長岡温泉鶴悲哀物語

Izunagaoka
Hot Spring Resort



Izunagaoka Town
Youth Leagues of Societies
of Commerce and Industry

2006 03 03

伊豆長岡商工会青年部
鶴創作民話制作プロジェクト

平安時代、
仁平の頃のお話です

伊豆長岡の豊かな森の奥に、天を突くほどの大きな杉の木と、その杉の枝葉から差し込む木洩れ日に照らされてきらきらと輝く大きな岩が、ひっそりと寄り添っていました。

お互いを労り合うように見えるその杉の木と岩を、長岡の人々は『堅く契られた神』と呼び、とても大切に奉っていました。というのも、この杉の木と岩の前で祈ると、病人の病は治り、貧しかった農民は豊作に恵まれ、また子宝に恵まれなかった夫婦に子が授かるなど、様々なご利益があると云われていたからです。この『堅く契られた神』の噂は各地に伝わり、遠方から訪れる人も多くあつたと言います。

ところが夜になると、この森に近づくものは誰もいませんでした。わずかな月明かりが照らす薄闇を濃い霧が包み、「キーコーキー」という身の毛もよだつ鳥のような不気味な鳴き声が聞こえてくるからです。人々は鳴き声の主を、森に住む妖怪の仕業と噂して、夜に鳴く不気味な鳥——『鵺』と呼んで恐れていました。人々の中で、実際に鵺の姿を見たものはおりませんでした。大変に醜く恐ろしい形相だと、まことにやかに囁かれていたのです。

それは、時の上皇であつた鳥羽院が、静養を兼ねて長岡の別荘を訪れた折りのことです。『堅く契られた神』の噂を耳にした鳥羽院は、多くの家臣を引き連れて森を訪れることにしました。そして、やっと辿り着いた森の奥で、杉の木と岩を見つけると、噂に違わぬその美しさに一目で魅入られてしまったのです。鳥羽院が特にお気に召したのは、木洩れ日に照らされて美しく輝く岩でした。

「この岩を京に持ち帰り、御所の庭に飾りたい。早速、準備を整えろ」鳥羽院は、家臣たちにそう言いつけました。

家臣たちはその命に従い、『堅く契られた神』の岩を京まで運び、御所の庭に据えました。すると、その日から毎夜、御所の庭から「キーコーキー」という不気味な鳴き声が聞こえるようになったのです。そして不思議なことに、この鳴き声が聞こえるようになった日から、鳥羽院は高熱を出し、床に伏すようになってしまいました。鳥羽院の熱はどんな名医の薬も、高僧の経も、効き目がありませんでした。

御所では、この不吉な災いの原因は、長岡の森に住み着く妖怪、『鵺』のもたらした災いに違いないと噂していました。鵺は『堅く契られた神』の岩に宿っていた妖怪で、その祟りだということです。

そんな噂に心痛めている、ひとりの宮女がいました。宮女の名は菖蒲と言いました。菖蒲は、『鶴』が理由もなく人間を傷つけるような恐ろしい妖怪とは、けして思えなかったのです。と言うのも、菖蒲は幼い頃、『鶴』に似た妖怪に一度だけ、会ったことがあったのです。

かつて菖蒲の父は、身分の高い身でありながら、ある罪に問われ、伊豆長岡に島流しに遭っていました。その時に産まれた庶子（今で言う妾の子供）が菖蒲だったのです。菖蒲はその生まれのせいで、叔父や従姉妹たちから一族の恥さらしといつも責め立てられていました。その度、菖蒲の心は引き裂かれ、自分の汚れた生まれを呪いました。

ある日、従姉妹たちのいじめに深く傷ついた菖蒲は、夜の闇に包まれた森に足を踏み入れました。昼間の森は人が訪れ、泣くことなどできせん。怖がって誰も近づかない夜の森なら、心ゆくまで泣けると思ったのです。菖蒲が夜の森に入るのは、これが初めてのことでした。しかし不思議と恐れはなく、菖蒲の心を安らかにしてくれました。『堅く契られた神』の杉の木と岩は、ぼんやりとした月明かりに照らされ、ひっそりと佇んでいました。その神秘的な美しさに、菖蒲はしばらく見とれてしまいました。すると、その時――。

「ギイオーツ！ グゴオーツ！！ ガーツ！！！」

地響きを起こす凄まじい鳴き声と共に、大きな影が菖蒲の前に立ちはだかりました。菖蒲は思わず悲鳴を上げて、泣き出してしまいました。すると影は急におろおろしたように言いました。

「すまない、許してくれ。おまえのような子供だとは思わなかった」

影の声は、先ほどの鳴き声の主とは思えぬほど、深く暖かい声でした。

菖蒲の涙が引くと、鶴の影は尋ねました。

「驚かしてすまなかった。しかしなぜ、おまえはこんな夜更けに森に入ってきたのだ？ まさか、迷子でもあるまい」

影の声に恐ろしさを感じなくなった菖蒲は、ぽつりぽつりとその訳を話し始めました。そのうちに、これまでの辛かったいじめの想い出が再び蘇り、また涙がぼろぼろと出てきました。しかし今度は不思議と、泣くほどに心は軽くなり、癒されていくのでした。

菖蒲が全てを話し終えると、影はなにも言わずにすっと姿を消し、間もなく杉の木の陰から、すっと一輪の花を差し出しました。その花は、美しく紫色に咲く、『菖蒲の花』でした。

「これはおまえに似合う花だ。花は咲（わら）っているもの。おまえも咲つておくれ」

菖蒲は花を受け取ると、杉の木の向こうにいる影に微笑みかけました。「その笑顔を忘れないでくれ——約束だ」

菖蒲が頷くと、影はすつと姿を消しました。

以来、菖蒲は誰にも言えない悲しみが積もると、この森を訪れました。すると必ず、それを承知していたかのように、岩の上には『菖蒲の花』が置かれていたのです。おかげで、菖蒲は影との約束を忘れずに、笑顔を絶やさずに長岡での暮らしを送ることができました。

そして七歳になった菖蒲は、罪を償つて許された父と共に京に上り、十六歳の頃より、鳥羽院に仕える宮女になりました。その例えようもない美貌と優しい心持ち、そして、周りの人々を幸せにする笑顔から、菖蒲は鳥羽院に寵愛を受けるようになったのです。

あの森での出来事は、菖蒲は今でもはつきりと覚えています。影に出会うことがなかったら、今の菖蒲の笑顔はなかったのですから。あの影はきつと、鶴だつたに違いない。菖蒲は御所の庭に出て、岩の側に行きました。森ではあんなに輝いていた岩には苔が生え、美しさは失われていました。その時、岩が急に鋭い光を放ちました。その眩しさに、菖蒲は思わず目をつぶりました。

恐る恐る目を開けると、菖蒲は、長岡のあの森の杉の木の下に立っていました。森はかつての豊かで生き生きとした姿を失っていました。辺りはぬかるみになり、夜でもないのに陽が差さず薄暗く、不気味な霧に包まれた異様な有様でした。菖蒲は鶴を呼んでみましたが、重い風の葉ずれに紛れて、「キーコーキー」と悲しげな声は聞こえるものの、影は現れてくれません。それでも菖蒲は鶴を呼び続けました。すると、一羽のトラツグミが杉から降りてきて、菖蒲に話し始めました。

「わたしは鶴様に仕えていたトラツグミです。あなたは菖蒲御前様ですね。鶴様からお話は伺っております。鳥羽院が持ち帰った大きな岩を、ここに戻して下さい。あの岩は、鶴様の『憎しみ』が封じ込められていたのです。この杉の木には、森の神様が宿っています。岩と杉の木が共にあれば、けして災いが起こることはないのです。その二つが引き離されてしまった今、岩に封じ込められた鶴様の『憎しみ』が、御所の庭で吹き出してしまったのです」

「『憎しみ』……？ 鶴の憎しみとはいったい、なんなのですか？」

菖蒲の問いに、トラツグミが答えようとしたその時……菖蒲は再び光に包まれ、御所の庭に戻っていたのでした。

同じ頃、菖蒲は熱にうなされ、夢の中にいました。

菖蒲はかつて美しかった頃の森にいました。杉の木の枝葉から差し込む木洩れ日が、きらきらと岩を照らしています。ふと気づくと、杉の木の陰に大きな影が見えました。その影を目にした瞬間、菖蒲の目に涙が溢れました。

「ごめんなさい……私には何もできませんでした。いったいどうすれば、あなたの心を鎮めることができるのですか？　お願いします……姿を現してその方法を教えて下さい」

影は、悲しみと絶望に満ちた、力無い声で答えました。

「もしも、おまえが俺の姿を見たら、おまえは俺を嫌いになるだろう……この姿は醜く、人間たちにも忌み嫌われてきたのだ」

「あなたは昔、私を救って下さいました。今度は私があなたを助けたいのです」

「もう遅い……御所の者たちは、『堅く契られた神』の岩を割ってしまった」

「災いを鎮める方法は、本当にもう、ないのですか……？」

「ひとつだけある……それは、俺を殺すことだ」

かつて鵠は、醜い自分の姿を忌み嫌ってきた人間を憎んでいました。その恨みは日に日に募っていき、鵠の心を蝕んでいきました。このままでは、鵠の心は『憎しみ』に支配されてしまう……それを心配した杉の木に宿る神様の計らいで、鵠は森の岩に『憎しみ』を封じ込めてもらいました。それが、鵠の『憎しみ』の正体だったのです。

「俺は『憎しみ』を封じ込めてもらった後、人間の前に出ることをやめた。これ以上、人間に嫌われ、そして彼らを憎むことに堪えられなかったからだ。だがおまえに出会って、俺は少しだけ人間を信じてみようと思った。おまえが俺に咲いかせてくれたからだ……けれど今、あの岩が割られ、俺の人間に対する『憎しみ』は解き放たれてしまった……菖蒲、俺を殺してくれ、頼む……そうでないと俺の『憎しみ』は、おまえまで……」

鵠を殺すことなど、できるはずありません。菖蒲にできることは、切ない鵠の気持ち思いやり、ただ、涙を流すことだけだったのです。そんな菖蒲の姿に、鵠は呟きました。

「……俺の『憎しみ』は、おまえの笑顔さえも……壊してしまったのか」

その声と影は、泣いているように震えていました。そして、影はすつと姿を消してしまつたのです。

菖蒲が床の中で目を覚ますと、縁側の向こう、大きな影が逃げるように去って行くのが見えました。

「鵺——!?!」

菖蒲は叫びましたが、大きな影はすぐに姿を眩ましました。うなだれた菖

蒲は、ふと床の側に何かが置かれていることに気づきました。——それは一輪の

『菖蒲の花』でした。その時です。

「ゴゴゴオー——ッ!?! グワア

ア——ッ!?!」

天空に轟く叫び声が、黒い雲の谷間から聞こえて

きました。菖蒲は叫び声のする庭の方へ、駆け出してきました。



頼政は、鵺に止めの弓を引きました。放った矢は鵺を正確に射抜き、鵺はその場にドカツと倒れました。

倒れた鵺の姿は顔が猿、身体が虎、尻尾が蛇という世にも醜く恐ろしい形相でした。しかし菖蒲はなりふり構わず、鵺に駆け寄りました。

菖蒲にとつて鵺は、幼い頃、辛い時に励ましてくれた何にも代え難い大切な心の支えだったのです。菖蒲は鵺を抱きしめて泣きました。

「どうとう助けることができませんでした……ごめんなさい、ごめんなさい」

菖蒲の涙は、鵺の顔の上にはらはらと落ちてゆきました。すると、不思議なことが起こったのです。鵺の大きな身体が、するすると縮んでいき、あつという間に一羽のトラツグミに姿を変えたのでした。トラツグミは言いました。

「解き放たれ、私の心に取り憑いた『憎しみ』は、頼政様の放った矢によって消滅したようだ……そしておまえの清い涙が、私に新しい命を授けてくれた」

「……よかった、本当に、よかった」

菖蒲が目には涙をいっぱいに溜めて微笑むと、トラツグミは呟きました。

「やっと……おまえの顔に笑顔が戻ったな……」

そういうと、トラツグミは瞬く間に飛び立っていきました。

間もなく、鳥羽院や家臣たちの体調は回復しました。その後、鳥羽院はすぐに鶴の岩を長岡の森に戻すことにしました。それから、頼政に鶴退治の褒美を与えることにしました。鳥羽院に褒美は何がよいかと尋ねられた頼政は、菖蒲との結婚を願い、その願いは聞き届けられました。

後日、結納を済ませた菖蒲と頼政は、長岡の森、『堅く契られた神』の地を訪れることにしました。岩と杉の木はかつてのように寄り添い、美しく佇んでいました。不思議なことに、割れていた岩も元通りになっています。きつと杉の木の神様が直してくれたのでしょうか。そして周りには、『菖蒲の花』が『堅く契られた神』を守るように咲き乱れていました。杉の木から差し込む木漏れ日は、傍らの岩と『菖蒲の花』を美しく照らしています。森はもう、すっかり精気を取り戻していました。

頼政は『堅く契られた神』に菖蒲と生涯幸せに暮らすことを誓い、菖蒲もまた、鶴との約束を守って、笑顔を絶やさず生き続けることを誓ったのでした。

『堅く契られた神』の杉の木と岩は、今もまだ、長岡の森のどこかにあ
るはずです。しかし今となつては、それがどこにあるか知る人はいません。
それは『堅く契られた神』が人を寄せ付けず、森の静寂を保っているか
らかもしれません。そして今でも、『菖蒲の花』が咲く頃になると、真
夜中の森の奥から「コー、コー」とトラツグミの鳴く声が聞こえるそうで
す。もしかしたらそれは、かつて鶴だったトラツグミの鳴き声かもしれません。
きつと遠い記憶の向こうにいる、菖蒲の笑顔を思い出して鳴いているので
しょう。

文・構成 正田 倫子・酒井雅明

プロフィール

正田 倫子 (しょうだ みちこ)

1975年 神奈川県生まれ

1999年 日本大学芸術学部演劇学科卒業

酒井雅明 (さかい まさあき)

1975年 東京生まれ

1999年 日本大学芸術学部映画学科脚本コース卒業

大学在学中に知り合い意気投合し絵本の共同制作を始めるその後小説やシナリオなどジャンルを問わず活動の場を広げ現在に至る

企画・監修

伊豆長岡商工会青年部
鶴創作民話制作プロジェクト